

Title	<書評論文>犯罪の語りのフレームとリソース
Author(s)	戸江, 哲理
Citation	京都社会学年報 : KJS = Kyoto journal of sociology (2004), 12: 243-251
Issue Date	2004-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/192646
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

<書評論文>

犯罪の語りのフレームとリソース

Theodore Sasson,
Crime Talk: How Citizens Construct a Social Problem.
(Aldine de Gruyter, 1995)

戸 江 哲 理

1 節. はじめに

本書の内容を一言で要約すると次のようになる。犯罪の語りをいくつかのフレームに分類し、それらのフレームがどのように、なぜ構築されるのかをリソースという観点から考察する。

構築主義的な研究プログラムは、人々が普段当然とみなし、本質的で不変であると感じているものが、実は社会的に構築されたものであり、したがって可変的なものであるという主張を含み（赤川 2001: 64-65）、それが読み手に大きな衝撃を与えてきたと思われる。

反面、構築主義の研究プログラムは、ともすればあるものが構築されているということ、そして、それがどのように構築されたのかということに終始し、「ではなぜ、他ならぬそれが構築されたのか」という問いに答えていないようにも思える。

構築主義の立場に留まりつつ、この問いに答えることはできないだろうか。本稿で私が本書を取り上げる理由は、まずここにある。つまり、フレーム分析とリソース分析を結びつけた本書の方法は、この問いに対する一つの答えだと思われるからである。

「なぜ」という問い（因果関係の問い）は、そもそも構築主義の理念に反するものかもしれない（中河 2001: 37-39）。しかし、構築されたものの背後に回り込む問いを立てることは、それ自体スリリングな試みであり、その点で本書は魅力的だと私は考えている。

本書の著者、セオドア・サッソンは1965年生まれ。専攻は政治社会学と犯罪学で、現在

はアメリカ・ヴァーモント州にあるミドルバリー大学の助教授である。著書には、本書の他に、キャサリン・ベケットとの共著になる『不正義の政治——アメリカにおける犯罪と処罰』（2003）がある。

2 節. 現代アメリカの犯罪をめぐる状況とサッソンの問い

近年合衆国の刑事司法システムはますます拡大しつつある。刑事司法システムにかかる予算は増え、警察の規模が拡大し、投獄率が急激に伸びている。

この事態は特に黒人に深刻である。1990年代半ばでは20歳から29歳の黒人男性の4人に1人が刑事司法システムの管理下にあった。

またアメリカでは、犯罪に厳しいというアピールは選挙キャンペーンにおいて非常に有力な武器となってきた。伝統的に共和党は「法と秩序」、「犯罪者に厳しい政策」(get-tough policy)を掲げてきたが、クリントン政権下で「暴力犯罪統制及び法執行法」が制定されたことに象徴されるように、民主党も犯罪に対しリベラルな立場から保守的な立場に変わりつつある。

では、何が近年の刑事司法拡大と選挙での犯罪政策の焦点化をもたらしているのであろうか。もっともありそうな答えは、アメリカ人は近年犯罪に対する関心、警戒心、恐怖心を高めているからだ、というものである。そしてこのように論じる者たちはしばしば、このアメリカ人の犯罪意識をアメリカ人の犯罪に対する通念 (conventional wisdom) から説明してきた。その通念とは次のようなものである。

アメリカ人はマスメディアにおいても、日常会話においても、犯罪を「下からの」脅威として構築する。人々は、典型的な犯罪者は貧しい（そして普通は黒人の）男性であると考えている。人々は犯罪が貧困や差別から引き起こされるといった意見を斥ける。そのかわり、犯罪を個人の道徳性の欠落や刑事司法システムの働きが足りないためだと考える。問題を解決するには、警察は犯罪者を厳しく取り締まり、法廷は「容赦なく」(get tough) 裁くべきであると人々は信じている（本書：4）。

つまり人々は、貧困やその他の構造的要因から犯罪を説明するのではなく、個人的な事

情や制度の不備から犯罪を説明するというのである。

この「アメリカの通念」仮説を受けてサッソンは、しかし本当に人々はそんな風に考えているのだろうか、と問う。そしてこの通念を検証することこそ、本書の第一の課題なのである。

3 節. フレーム分析

しかし、どうやれば人々の犯罪に対する意識を知ることができるだろうか。ここでサッソンは、アーヴィング・ゴッフマンに由来し、ウィリアム・ギャムソン（1992）が発展させたフレーム分析という手法を用いる。それは質的な意識調査の一つの試みであるともいえるし、世間の言説（popular discourse）を代表するグループディスカッションの内容分析であるともいえるだろう。

ディスカッショングループはボストンのクライムウォッチ（犯罪監視団）20グループ、110人であり、白人のグループが8つ、黒人のグループが9つ、人種が混合しているものが3つだった。

またフレーム分析は公共の言説を代表する新聞の署名記事（op-ed）に対しても行われる。対象となる記事は、1991年から92年にかけての「ニューヨーク・タイムズ」など5紙の犯罪に関する署名記事58記事である。

本書で用いられるフレームは、〈欠陥システム〉（faulty system）、〈社会解体〉（social breakdown）、〈機会阻害〉（blocked opportunities）、〈暴力的メディア〉（media violence）、〈人種差別システム〉（racist system）の5つである（以下〈 〉はフレームを指す）。これらは、それぞれコード表によって発言や記事からコード化される。

さて、コード化することにより、それぞれのフレームがどれくらい支持、あるいは反対されているのか、つまり、どのフレームが「強く」、どのフレームが「弱い」のかを数字で示すことができる。これをサッソンはフレームの「パフォーマンス」（性能）と呼び、署名記事とグループディスカッションの両方において、それぞれの基準を用いて測定している（図表参照）。

このように質的な分析でありながら、数字で示す部分を残していることが本書の説得力を高めているといえるだろう。

なお紙幅の関係で、ここでは〈人種差別システム〉と〈暴力的メディア〉の記述を割愛する。この2つのフレームのパフォーマンスは低い。そしてこれらを省いても、サッソンがアメリカの通念を検証する作業をかなり正確に説明できると判断したためである。

早速〈欠陥システム〉から見ていこう。〈欠陥システム〉は〈社会解体〉と並んで5つのフレーム中最も有力なもの1つである。このフレームの主張は第一に、犯罪は刑事司法システムの「甘さ」(寛大さ)から生じているというものである。だから、警察や法廷は犯罪者により厳しくし、警察活動に対する法規制を緩和しなければならない。

このように〈欠陥システム〉はアメリカの「通念」に最も親和な、そして最も保守的なフレームと特徴づけられる。

例えば、参加者たちは「回転ドア」(revolving door 犯罪者が刑務所から出てくるのがあまりにも早いと皮肉ったもの。父ジョージ・ブッシュが選挙戦で対立候補を攻撃するのに用いたことで知られる)、「警察に手錠をしている」(handcuff the police)などの政治的キャッチフレーズを好んで引用した。また少年犯罪に対する厳罰化や死刑の導入について言及した。

ここで注意すべきは、〈欠陥システム〉は同時に「非効率性」の主張も含むということである。これは刑事司法システムの処理、対応の迅速化、正確性の改善、システムの無駄の削減などを主張するものであり、純粋にシステムの効率性の改善を求めるものであって、

図表：5つのフレームとそのパフォーマンス

フレーム	欠陥システム	社会解体	機会阻害	暴力的メディア	人種差別システム
社会学的起源	C.ベッカリーア	シカゴ学派	R.K.マートン	E.サザーランド G.タルド	ラベリング理論 コンフリクト理論
原因	刑事司法システムの甘さと非効率性	家族やコミュニティの解体	貧困や不平等	マスメディア上の暴力	刑事司法システムの人種差別的運営
対策	刑事司法は犯罪者にもっと厳しくすべし	市民は連帯し、コミュニティを再建すべし	政府は雇用創出と貧困対策により、犯罪の根本原因に対処すべし	政府はマスメディアの暴力表現を規制すべし	アフリカ系アメリカ人は、団結して正義を要求すべし
シンボル	ウィリー・ホートン「回転ドア」	キティ・ジェノヴェーゼ	マクドナルドでハンバーガーを焼く	2 Live Crew	ロドニー・キングステュワート事件
反論	警察の専横をもたらさう 刑事司法システムと犯罪は無関係	最良の家庭で育っても、犯罪をする者はい	貧困は犯罪の原因ではない 犯罪をするかどうかは本人の選択だ	なし	警察活動に人種差別はない
支持する署名記事数	甘さ9, 非効率28	21	19	3	6
反論する署名記事数	甘さ16, 非効率7	3	6	0	4
ディスカッションのパフォーマンス・高	10	12	3	積極的なグループ数 5	弱いバージョンのグループ数 5
同上・混合	9	8	9	消極的なグループ数	強いバージョンのグループ数 7
同上・低	1	0	8	0	

本書p.18から作成。パフォーマンスに関しては、本書3章～6章の記述(百分率など)をもとに算出した。

政治的に中立である。例えば、参加者たちはマスメディアで仕入れた「リッチな刑務所生活」（アメリカの刑務所には政策上、非常に整った設備をもつものがある）について皮肉っている。

署名記事とグループディスカッションにおける〈欠陥システム〉のパフォーマンスを比べてみると、署名記事では「非効率性」が「甘さ」よりもかなり有力である。ディスカッションでは、逆に「甘さ」のほうが相当有力だった。つまり公共の言説以上に、人々は保守的な傾向をもつ疑いがある。

〈社会解体〉は5つのフレームの中で署名記事においても、ディスカッションにおいても最も高いパフォーマンスを誇る。〈社会解体〉は犯罪の原因をコミュニティや家族の解体に求める。したがって一見それは犯罪を社会構造に結びつけて考えようとするリベラルな立場であるように見える。実際そうなのだろうか。

予想されるように、〈社会解体〉で語られる犯罪の多くは少年犯罪、非行である。その原因は曖昧に道徳性や価値の衰退、危機に求められることもあれば、より具体的に学校や親の権威の衰退が唱えられることもある。しかし特に多いのは、自分が育った頃と比較して、親のしつけができていないという発言である。また親が子どもを育てるのには若すぎなのだ (babies having babies) と言われたりもする。

それに加えてコミュニティの衰退が原因だと考えることも多い。例えば、昔は隣近所でもっと助け合ったものだし、子どもだって地域ぐるみでしつけたものだ、などと語られる（ある参加者はそれを「二重げんこつ」という言葉で表現した。つまり、まず近所の人にたたかれ、家に帰って親にもたたかれるというもの）。

以上からわかるように、人々は自分の育った頃と現在の家族、コミュニティとを比較することなどを通じて、社会解体がいかに進んでいるかを記述することはあっても、なぜそうなったのかを説明することはほとんどない。つまり、〈社会解体〉は犯罪を構造的要因に結びつけるのではなく、社会解体の要因には言及しない、政治的に中立的な形で表現されることが多いといえる。

〈機会阻害〉は、犯罪が失業などによる貧困や差別などが原因でもたらされると考える。したがって政策としては、十分な教育、良い仕事の提供などが必要であるとする。署名記事においてはとりわけ職業訓練の機会を提供することが大事だという主張が多く見られた。以上のように、〈機会阻害〉は犯罪に対する構造論的な見方である。

ではそのパフォーマンスはどうか。〈機会阻害〉は署名記事においては〈欠陥システム〉

や〈社会解体〉に次ぐ十分なパフォーマンスを得ている。それに対し、ディスカッションでは、前の2フレームに比べてかなり分が悪い。

つまり、〈機会阻害〉のリベラルな主張は、人々の日常会話の中に強い足場を持たないということである。逆にこのフレームに反対する主張の中にこそ、参加者たちは自分の経験にもとづくものが多く見られるのである。

例えば、家が貧しく14歳の頃から放課後に働いていたというクレアは、稼いだお金のうち10ドルを母親に渡し、残りのお金で自分の欲しいものを買っていた。貧しいから犯罪をするというのは言い訳に過ぎないという。また、自分もインナーシティで育ったというクリスティーンは、貧しくても教育は受けられるし、仕事も見つけられる。そうしないのは単にその子達が怠けているだけで、犯罪をするかどうかは「本人次第」だという。

4 節. リソース分析

フレーム分析を受けて、当初のアメリカの「通念」に関する問いは次のように変換される。すなわち、「なぜ〈欠陥システム〉と〈社会解体〉は強く、〈機会阻害〉は弱いのか」ということである。

この問いに対して、サッソンは、フレーミングをするのに必要なリソース（資源）は何かを考えることで答えようとする。

サッソンはリソースを3つのタイプに分ける。経験知（*empirical wisdom*）、世間知（*popular wisdom*）、メディア言説（*media discourse*）である。

経験知は自分や家族の体験談などであり、世間知は諺や格言、聖書の引用など、そしてメディア言説はニュースで有名な人物やキャッチフレーズ、スローガン、脚光を浴びる事実などである。

そして、人々は、全てのタイプのリソースが手に入るとき、そのフレームを支持する強い論拠を得ることになる。

このことは、各フレームにおける各リソースの出現を調べることで確認できる。高いパフォーマンスを誇るフレーム（〈欠陥システム〉、〈社会解体〉、黒人の〈人種差別システム〉）を見てみると、3つのリソース全てが現れる場合が、他のフレームより多いことがわかる。また強いフレームでは、経験知とメディア言説の複数回の引用も他のフレームより多かった。

強いフレームには豊かなリソースがあることはわかった。では次に「なぜ、強いフレー

ムには、「リソースが豊かにあるのか」を考えなければならない。これはつまりリソースの入手可能性の要因・条件を考えることであり、資源動員論における動員構造の分析である（長谷川 2003：77）。

まず〈欠陥システム〉や〈社会解体〉が強いのは、まずそれが広範な人々の支持を集めているということに他ならない。したがって、これらのフレームを構築するリソースは、合衆国全体に及ぶ広範な動員構造を持つはずである。それがすなわち、アメリカの文化、マスメディア、そして都市生活者としての経験である。

アメリカでは伝統的に、自己信頼（自分のことは自分で責任を持つ）、個人主義（個性、自律性、自由な選択の重要性）などの価値が重んじられる。それは、階級構造は開いており、誰でも出世できる、あるいは犯罪をするかどうかは本人次第だ、という世間知の基盤なのである。この発想は、〈欠陥システム〉を生み出すと同時に、社会構造に原因を求める〈機会阻害〉のリソースを入手困難にする。

またアメリカでは伝統的に、善と悪の構図で犯罪と処罰を考えており、犯罪に最も有効で、かつ道徳的な対処法は処罰である、という神話があるとサッソンは言う。これも当然ながら、〈欠陥システム〉を作り出すリソースを手に入りやすくする。

次にマスメディアであるが、新聞の署名記事のフレーム分析からもわかるように、公共の言説は数の上で、人々が〈欠陥システム〉、〈社会解体〉を構築するのに有利に働く。また「回転ドア」、「家族の価値」などのキャッチフレーズの多くが、これらのフレームを構築するのに有利なものであることも指摘できる。

またニュース番組に目を転じて、犯罪事件は、社会の大きな流れの一部と捉えられるよりも、一つの物語として報道されることが多く、犯罪は個人の責任だという世間知を補強する傾向がある。また刑事ものドラマは、犯罪 - 処罰という世間知を補強する。

3つ目に、人々はアメリカの都市で犯罪に接しながら生活することで、さまざまな経験をする（例えば、陪審員になる、警察に通報する、麻薬取引の現場を押さえる警官を見る）。これらの刑事司法システムとのかかわった経験は、世間知とメディア言説で〈欠陥システム〉が有力なために、〈欠陥システム〉の強化につながるという。また、家族生活という面では、子どもを育てた経験、子どもとして過ごした経験は、「昔の親は厳しかった」などのように、〈社会解体〉に有利な経験知のリソースを提供する。

5 節. 本書を振り返って

以上から、〈欠陥システム〉の活躍と〈機会阻害〉の不人気という形で、「アメリカの通

念」仮説がそれなりの妥当性をもつことが確認された。

そして、アメリカの文化やマスメディア、人々の生活経験が、両フレームのパフォーマンスを左右していることが明らかにされた。

とはいえ、一番人気があり、批判も少なかったのは、直接的には通念と関係がない〈社会解体〉であった。サッソンはここにリベラル派の抵抗拠点を見出し、貧困や人種差別が道徳性の危機をもたらし、犯罪を引き起こしているという、リベラルな〈社会解体〉フレームを提唱している。

にもかかわらず、〈社会解体〉のパフォーマンスを決定する要因は、マスメディアと家庭生活ぐらしか挙げられていない。これは全てのフレームに当てはまるが、本書で挙げられたもの以外の要因も検討すべきだし、挙げられた要因についても見落とし部分がないか検討する余地がある（例えば、居住地域の安全性とリソースの内容の関係）。

本書において展開されたフレーム分析とリソース分析を組み合わせるという方法は、既に社会運動論の分野では盛んになっているらしい（野宮 2002）。実際、議論の進め方という点では、本書はウィリアム・ギャムソンの『トーキング・ポリティクス』（1992）とそっくりだ。

私は、実体論と構築主義をいわば「接木」するこの方法を、「なぜ」に答えるものとして評価したい。しかし、「フレームが構築されるのは、こんなリソースが手に入るからです」と答えるサッソンに、私は何かはぐらかされたようにも感じている。

つまり、リソースとして挙げられた文化やマスメディアの影響というのは、常識的なものだし、リソースはフレームが構築される必要条件であって、十分条件ではないであろう。サッソンは、原因の追究において慎重になりすぎており、より野心的な仮説を立てても面白かったのではないかと、とも私には思われる。

とはいえ、本書は読みやすい文章で書かれている上、構成もすっきりしており、フレーム分析とリソース分析の仕方も、わかりやすく説明されている。また、この方法からは、サッソンがリベラルな〈社会解体〉を提唱したように、言説戦略上の知見を得ることもできる。

近年日本でも犯罪に対する不安が高まりつつあるという。他方で、少年法の厳罰化に対する意見に見られるように、日本人は犯罪者に対して厳しい態度をとる傾向があると言われる。

このような問題に対して「そもそも人々は本当に不安を感じているのだろうか」、「人々

は本当に厳罰化を求めているのだろうか」、「不安を感じているとすれば、なぜそのような不安は生じたのか」などの問いを立てるならば、本書はきっと格好のお手本になるに違いない。

参考文献

- 赤川学, 2001, 「言説分析と構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房, 63-83.
- Beckett, Katherine and Theodore Sasson, 2003, *Politics of Injustice: Crime and Punishment in America*, 2nd ed., New York: Sage.
- Gamson, William, 1992, *Talking Politics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 長谷川公一, 2003, 『環境運動と新しい公共圏——環境社会学のパースペクティブ』有斐閣.
- 中河伸俊, 2001, 「方法論のジャングルを越えて——構築主義的な質的探求の可能性」『理論と方法』16(1): 31-45.
- 野宮大志郎編, 2002, 『社会運動と文化』ミネルヴァ書房.

(とえ てつり・修士課程)